

竜

芥川龍之介

青空文庫

宇治うじの大納言隆国だいなごんたかくに「やれ、やれ、昼寝の夢が覚めて見れば、

今日はまた一段と暑いようじや。あの松まつケ枝えの藤ふじの花さえ、ゆさ

りとさせるほどの風も吹かぬ。いつもは涼しゆう聞える泉の音も、

どうやら油蟬あせの声にまぎれて、反かえつて暑苦しゆうなつてしもうた。

どれ、また童部わらんべたちに煽あおいででも貰もらおうか。

「何、往來のものどもが集あつた？ ではそちらへ参ると致いたそう。

童部わらんべたちもその大団扇おおうちわを忘れずに後からかついで参まれ。

「やあ、皆のもの、予が隆国たかくにじゃ。大肌ぬぎの無礼ゆゑは赦ゆるしてく

れい。

「さて今日はその方どもにちと頼みたい事があつて、わざと、この宇治の亭へ足を止めて貰うたのじや。と申すはこの頃ふところへ参つて、予も人並に双紙そうしを一つ綴ろうと思ひ立つたが、つらつら独り考えて見れば、生憎あいにく予はこれと云うて、筆にするほどの話も知らぬ。さりながらあだ面倒な趣向などを凝らすのも、予のような怠けものには、何より億劫おつくうせんぼん千万じや。ついては今日から往來のその方どもに、今は昔の物語を一つずつ聞かせて貰うて、それを双紙に編みなそうと思う。さすれば内裡だいりの内うち外そとばかりうるついで居る予などには、思ひもよらぬ逸事奇聞いつじが、舟にも載せ車にも積むほど、四方から集つて参るに相違あるまい。何と、皆

のもの、迷惑ながらこの所望を叶えてくれる訳には行くまいか。
 「何、叶えてくれる？ それは重 疊、では早速一同の話を順
 々にこれで聞くと致そう。

「こりや童部たち、一座へ風が通うように、その大団扇で煽い
 てください。それで少しは涼しくもなろうと申すものじゃ。鋳物師
 も陶器造も遠慮は入らぬ。二人ともずっとこの机のほとりへ
 参れ。鮎売すしうりの女も日が近くば、桶はその縁えんの隅へ置いたが好よ
 ぞ。わ法師も金鼓ごんくを外はずしたらどうじゃ。そこな侍も山伏たかむしろも簞たかむしろを敷
 いたろうな。

「よいか、支度が整うたら、まず第一に年かさな陶器造すえものつくりの翁おきな
 から、何なりとも話してくれい。」

二

翁おきな「これは、これは、御叮嚀ごあいさつな御挨拶ごあいさつで、下賤げせんな私わたくしどもの申し上げます話を、一々双紙へ書いてやろうと仰おつしや有あいます——そればかりでも、私の身にとりまして、どのくらい恐多おそいかわかりません。が、御辞退ごじたい申しましては反かえつて御意ごいに逆さかららますから、御免ごめんを蒙まかつて、一通り多たわい曖あいもない昔話を申し上げると致いたしましょう。どうか御退屈ごたいくつでもしばらくの間、御耳ごみみを御借ごかし下さくださいまし。

「私どものまだ年若としわかな時分、奈良に蔵人くらうどとくごう得業えい惠印えいと申しまし

て、途方とほうもなく鼻の大きい法師ほうしが一人居りました。しかもその鼻の先が、まるで蜂にでも刺されたかと思うくらい、年が年中恐しくまっ赤なのでございます。そこで奈良の町のものが、これに譚あ名だをつけまして、鼻蔵はなくら——と申しますのは、元来大鼻の蔵人くろうど得業とくごうと呼ばれたのでございますが、それではちと長すぎると申しますので、やがて誰云うとなく鼻蔵人はなくろうどと申し囃はやしました。が、しばらく致しますと、それでもまだ長いと申しますので、さてこそ鼻蔵鼻蔵と、謡うたわれるようになったのでございます。現に私も一両度、その頃奈良の興福寺こうふくじの寺内で見かけた事がございますが、いかさま鼻蔵とでも譏そしられそうな、世にも見事な赤鼻てんぐの天狗鼻ばなでございました。その鼻蔵の、鼻蔵人の、大鼻の蔵人得業

の恵印えいん法師ほうしが、ある夜の事、弟子もつれずにただ一人そつと猿さる沢わの池のほとりへ参りまして、あの采女うねめ柳やなぎの前の堤つつみへ、『三月三日この池より竜昇らんずるなり』と筆太に書いた建札を、高々と一本打ちました。けれども恵印えいんは実の所、猿沢の池に竜などがほんとうに住んでいたかどうか、心得ていた訳ではございません。ましてその竜が三月三日に天てん上じょうすると申す事は、全く口から出まかせの法螺ほらなのでございます。いや、どちらかと申しましたら、天上しないと申す方がまだ確かだったのでございませう。ではどうしてそんな入らざる真似を致したかと申しますと、恵印は日頃から奈良の僧俗が何かにつけて自分の鼻を笑いものにするのが不平なので、今度こそこの鼻蔵人がうまく一番かついだ

挙句、さんざん笑い返してやろうと、こう云う魂胆こんたんで悪戯いたずらに
 とりかかったのでございます。御前ごぜんなどが御聞きになりましたら、
 さぞ笑しょうし止しな事と思召しめしましょうが、何分今は昔の御話で、その
 頃はかような悪戯を致しますものが、とかくどこにもあり勝ちで
 ございました。

「さてあくる日、第一にこの建札を見つけましたのは、毎朝興福
 寺の如来様にょらいさまを拜まみに参ります婆おさんで、これが珠数じゆずをかけた手
 に竹杖しやくじやうをせつせとつき立てながら、まだ靄もやのかかっている池いけのほ
 とりへ来きかかりますと、昨日きのうまでなかつた建札けんさつが、采女柳さいにょの下に
 立つて居ゐります。はて法会ほうえの建札けんさつにしては妙な所に立つているな
 と不審ふしんには思おもったのでございますが、何分文字が読よめませんので、

そのまま通りすぎようと致しました時、折よく向うから偏へん衫さんを着た法師が一人、通りかかったものでございますから、頼んで読んで貰いますと、何しろ『三月三日この池より竜昇らんずるなり』で、——誰でもこれには驚いたでございましょう。その婆さんも呆あつ氣にとられて、曲った腰をのしながら、『この池に竜などが居りましようかいな。』と、とぼんと法師の顔を見上げますと、法師は反って落ち着き払って、『昔、唐からのある学者が眉まゆの上に瘤こぶが出来て、痒かゆうてたまらなんだ事があるが、ある日一天にわか俄にわかに搔かき曇曇って、雷雨車軸を流すがごとく降り注そいだと見てあれば、たちまちその瘤がふつと裂けて、中から一匹の黒竜が雲を捲いて一字に昇天したと云う話もござる。瘤の中にさえ竜が居たなら、ま

してこれほどの池の底には、何十匹となく 蛟こうりゆう 竜りゆう 毒蛇わだかまが蟠かまつて
 居いようも知れぬ道理ことわりじゃ。』と、説法もつごしたそうでございます。
 何しろ出家もつごに妄語もつごはないと日頃ひごとから思いこんだ婆ばさんの事ことでござ
 いますから、これを聞いて肝きもを消きしますまい事ことか、『成程せいじやうそう承
 りますれば、どうやらあの辺へんの水みづの色いろが怪あやしいように見みえますわ
 いな。』で、まだ三月三日さんげつさんじつにもなりませんのに、法師ほふしを独ひとりり後あとに
 残のこして、喘あえぎ喘あえぎ念ねん仏ぶつを申まをしながら、竹杖ちくじやうをつく間まもまだるこし
 そうに急いそいで逃にげてしまいました。後あとで人目ひとめがございませんでし
 たら、腹はらを抱かかえたかつたのはこの法師ほふしで——これはそうでござい
 ましよう。実はあの発頭ほつとう人にんの得業とくごう恵印えいん、譚名あだなは鼻蔵はなくらが、も
 う昨夜ゆうべ建てた高札こうさつにひっかかかつた鳥とりがありそうだからいな、は

なはだ怪しからん量見で、容子ようすを見ながら、池のほとりを、歩いて居ったのでございますから。が、婆さんの行つた後には、もう早立ちの旅人と見えて、伴ともの下人げにんに荷を負わせた虫の垂衣たれぎぬの女が一人、市女笠いちめがさの下から建札を読んで居るのでございます。そこで恵印は大事をとつて、一生懸命笑を噛み殺しながら、自分も建札の前に立つて一応読むようなふりをする、あの大鼻の赤鼻をさも不思議そうに鳴らして見せて、それからのそのそ興福寺こうふくじの方へ引返して参りました。

「すると興福寺の南大門なんだいもんの前で、思いがけなく顔を合せましたのは、同じ坊に住んで居つた恵門えもんと申す法師でございます。それが恵印えいんに出会いますと、ふだんから片意地なげじげじ眉をちよい

とひそめて、『御坊ごぼうには珍しい早起きでござるな。これは天氣が
 変わるかも知れませぬぞ。』と申しますから、こちらは得たり賢し
 と鼻を一ぱいににやつきながら、『いかにも天氣ぐらいは変わるか
 も知れませぬて。聞けばあの猿沢の池から三月三日には、竜が天
 上するとか申すではござらぬか。』と、したり顔に答えました。
 これを聞いた恵門は疑わしそうに、じろりと恵印の顔を睨ねめまし
 たが、すぐに喉を鳴らしながらせせら笑つて、『御坊は善い夢を
 見られたな。いやさ、竜の天上するなどと申す夢は吉兆じゃとか
 聞いた事がござる。』と、鉢はちの開ひらいた頭そびやを聳そびかせたまま、行きす
 ぎようと致しましたが、恵印はまるで独り言のように、『はてさ
 て、縁無しゆじようき衆しゆじよう生どは度し難しじや。』と、呟つぶやいた声でも聞えた

のでございましょう。麻緒あさおの足駄あしだの齒よじを、つて、憎々にくにくしげにふり返りますと、まるで法論でもしかけそうな勢いで、『それとも竜が天上すると申す、しかとした証拠がござるかな。』と問い詰つめるのでございます。そこで恵印はわざと悠々と、もう朝日の光がさし始めた池の方を指さしまして、『愚僧の申す事が疑わしければ、あの采女うねめやなぎ柳りゅうの前まへにある高札こうさつを読まれたがよろしゅうござろう。』と、見下みくだすように答えました。これにはさすがに片意地な恵門も、少しは鋒ほこさきを挫くかれたのか、眩まぶしそうな瞬またたきを一つするど、『ははあ、そのような高札こうさつが建ちましたか。』と氣のない声で云い捨てながら、またてくてくと歩き出しましたが、今度は鉢はちの開いた頭を傾けて、何やら考えて行くらしいのでございます。

その後姿を見送った鼻藏はなくらうど人の可笑おかしさは、大抵御推察が参りましよう。恵印えいんはどうやら赤鼻の奥がむず痒かゆいような心もちがして、しかつめらしく南大門なんだいまんの石段を上って行く中にも、思わず吹き出さずには居られませんでした。

「その朝でさえ『三月三日この池より竜昇らんずるなり』の建札は、これほどの利きき目がございましたから、まして一日二日と経つて見ますと、奈良の町中どこへ行つても、この猿沢さるさわの池の竜うわさの噂うわさが出ない所はございません。元より中には『あの建札も誰かの悪戯いたずらであろう。』など申すものもございましたが、折から京では神泉苑しんせんえんの竜が天上致したなどと申す評判もございましたので、そう云うものさえ内心では半信半疑と申しましようか、事に

よるとそんな大變があるかも知れないぐらいな氣にはなつて居つたのでございます。するとここにまた思いもよらない不思議が起つたと申しますのは、春日かすがの御社おやしろに仕えて居りますある禰宜ねぎの一人娘で、とつて九つになりますのが、その後十日のちと経たない中に、ある夜母の膝を枕まくらにしてうとうとと致して居りますと、天から一匹の黒竜が雲のように降つて来て、『わしいよいよ三月三日に天上する事になつたが、決してお前たち町のものに迷惑はかけない心算つもりだから、どうか安心していてくれい。』と人語を放つて申しました。そこで娘は目がさめるとすぐにこれこれこうこうと母親に話しましたので、さては猿沢の池の竜が夢ゆめ枕まくらに立つたのだと、たちまちまたそれが町中おおの大評判になつたではござい

ませんか。こうなると話にも尾鰭おひれがついて、やれあすこの稚児ちごにも竜が憑ついて歌を詠んだの、やれここの巫女かんなぎにも竜が現れて託た宣くせんをしたのと、まるでその猿沢の池の竜が今にもあの水の上へ、首でも出しそうな騒さわぎでございます。いや、首までは出しも致しますすまいが、その中に竜の正体を、目まのあたりにしかと見とどけたと申す男おやじさえ出て参りました。これは毎朝川魚いぢを市へ売りに出ます老爺おやじで、その日もまだうす暗いのに猿沢の池へかかりますと、あの采女うねめ柳やなぎの枝垂しだれたあたり、建札つつみのある堤つみの下に漫々と滲しみえた夜明け前の水が、そこだけほんのりとうす明あかるく見えたそうでございます。何分にも竜の噂うわさがやかましい時分でございますから、『さては竜りゅうじん神じんの御出ごしゅつましか。』と、嬉しいともつかず、恐し

いたもつかず、ただぶるぶる^{どつぶる}胴震いをしながら、川魚の荷をそ
 こへ置くなり、ぬき足にそつと忍び寄ると、采女柳につかまつて、
 透^すかすように、池を窺いました。するとそのほの明^{あかる}い水の底に、
 黒^{くろがね}金の鎖を巻いたような何とも知れない怪しい物が、じつと蟠^{わだかま}
 つて居りましたが、たちまち人音^{ひとおと}に驚いたのか、ずるりとその
 とぐろをほどきますと、見る見る池の面^{おもて}に水脈^{みお}が立つて、怪しい
 物の姿はどことも知れず消え失せてしまったそうでございます。
 が、これを見ました老爺^{おやじ}は、やがて総身^{そうしん}に汗をかいて、荷を下
 した所へ来て見ますと、いつの間にか鯉^{こい}鮒^{ふな}合せて二十尾^びもいた
 商売^{あきないもの}物がなくなつていたそうでございますから、『大^{おお}方^{かた}劫^{こう}を
 経^{かわ}た獺^{おそ}にでも欺^{だま}されたのであろう。』などと晒^{わら}うものもございま

した。けれども中には『竜王が鎮護遊ばすあの池に瀬の棲もう筈もないから、それはきつと竜王が魚鱗うろくずの命を御憫おあわれみになつて、御自分のいらつしやる池の中へ御召し寄せなすつたのに相違ない。』と申すものも、思いのほか多かつたようでございます。

「こちらは鼻蔵はなくらの恵印えいん法師ほうしで、『三月三日この池より竜昇りんらんずるなり』の建札が大評判になるにつけ、内々ないないあの鼻をうごめかしては、にやにや笑つて居りましたが、やがてその三月三日も四五日の中に迫つて参りますと、驚いた事には摂津せつづの国桜井さくらいにいる叔母の尼が、是非その竜の昇天を見物したいと申すので、遠い路をはるばると上つて参つたではございませんか。これには恵印も当惑して、嚇おどすやら、賺すかすやら、いろいろ手を尽して桜井

へ歸つて貰おうと致しましたが、叔母は、『わしもこの年じやで、

りゅうおう

竜王の御姿をたつた一目拝みさえすれば、もう往生しても本

望じや。』と、剛情にも腰を据えて、甥の申す事などには耳を借

そうとも致しません。と申してあの建札は自分が悪戯いたずらに建てた

のだとも、今更白状する訳には参りませんから、恵印もとうとう

我がを折つて、三月三日まではその叔母の世話を引き受けたばかり

でなく、当日は一しよに竜神りゅうじんの天上する所を見に行くと云う

約束までもさせられました。さてこうなつて考えますと、叔母の

尼さえ竜の事を聞き伝えたのでございませすから、大和やまとの国内は申

すまでもなく、摂津いづみの国、和泉いづみの国、河内かわちの国を始めとして、事

によると播磨はりまの国、山城やましろの国、近江おうみの国、丹波たんばの国のあたりま

でも、もうこの噂がいちえん一円にひろまっていますのでございましょう。つまり奈良の老ろうにやく若をかつごうと思つてした悪戯が、思いもよらず四方よもの国々で何万人とも知れない人間をだま瞞す事になつてしまつたのでございます。恵印はそう思いますと、可笑おかしいよりは何となく空恐しい気が先に立つて、朝あさ夕ゆ叔母の尼の案内がてら、つれ立つて奈良の寺々を見物して歩いて居ります間も、とんとけ検非違使びいしの眼をぬす偷んで、身を隠している罪人のようなうしろ後めたい思ひがして居りました。が、時々往来のもの話などで、あの建札へこの頃は香花こうげが手向たむけてあると云う噂を聞く事でもございまずと、やはり気味の悪い一方では、一ひとかど大手柄でも建てたような嬉しい気が致すのでございます。

「その内に追い追ひ日数ひかずが経つて、とうとう竜の天上する三月三日になつてしまいました。そこで恵印は約束の手前、今更ほかに致し方もございけませんから、渋々叔母の尼ともの伴をして、猿沢ざるさわの池が一目に見えるあの興福寺こうふくじの南大門なんだいもんの石段の上へ参りました。丁度その日は空もほがらかに晴れ渡つて、門の風鐸ふうたくを鳴らすほどの風さえ吹く気色けしきはございませんでしたが、それでも今日きょうと云う今日を待ち兼ねていた見物は、奈良の町は申すに及ばず、河内、和泉、摂津、播磨、山城、近江、丹波の国々からも押し寄せて参つたのでございましょう。石段の上に立つて眺めますと、見渡す限り西も東も一面の人の海で、それがまた末はほのぼのと霞あせをかけた二条の大路おおじのはてのはてまで、ありとあらゆる烏帽子えぼし

の波をざわめかせて居るのでございます。と思うとそのところど
 ころには、青糸毛あおいとげだの、赤糸毛あかいとげだの、あるいはまた梅檀せんだんびき
 庇しだのの数寄すきを凝ぎらした牛車ぎっしやが、のっしりとあたりの人波を
 抑おさえて、屋形やかたに打うった金銀の金具かなぐを折おからうらかな春の日ざし
 に、眩まばゆくきらめかせて居りました。そのほか、日傘ひがさをかぎすも
 の、平張ひらばりを空に張り渡すもの、あるいはまた仰ぎょうぎよう々々しく棧敷さしき
 を路に連ねるもの——まるで目の下の池のまわりは時ならない加か
 茂もの祭でも渡りそうな景色でございます。これを見た恵印法師えいんほうしは
 まさかあの建札を立てたばかりで、これほどの大騒さわぎが始まろう
 とは夢にも思わずに居りましたから、さも呆あはれ返かえったように叔母
 の尼の方をふり向むきますと、『いやはや、飛とんでもない人出でご

ざるな。』と情けない声で申したきり、さすがに今日は大鼻を鳴らすだけの元氣も出ないと見えて、そのまま南大門なんだいもんの柱の根がたへ意氣いくじ地うづくまなく蹲うづくまつてしまいました。

「けれども元より叔母の尼には、恵印のそんな腹の底が呑みこめる訳もございませんから、こちらは頭巾ずきんもずり落ちるほど一生懸命首を延ばして、あちらこちらを見渡しながら、成程竜神の御棲おすまいになる池の景色は格別だの、これほどの人出がした上からは、きつと竜神も御姿を御現わしなさるだろうのと、何かと恵印をつかまえては話しかけるのでございます。そこでこちらにも柱の根がたに坐つてばかりは居られませんので、嫌々腰もとを擡もたげて見ますと、ここにも揉烏帽子もみえぼしや侍烏帽子さむらいえぼしが人山ひとやまを築いて居りましたが、

その中に交つてあの恵門法師も、相不変鉢あいかわらずの開いた頭を一きわ高く聳やかせながら、鶺鴒うの目もふらず池の方を眺めて居るではございませんか。恵印は急に今までの情けない気もちも忘れてしまつて、ただこの男さえかついでやつたと云う可笑おかしさに独り撥くすぐれながら、『御坊ごぼう』と一つ声をかけて、それから『御坊も竜の天上を御覧かな。』とからかうように申しましたが、恵門は横柄おうへいにふりかえると、思いのほか真面目な顔で、『さようでござる。御同様大分待だいぶんち遠い思いをしますな。』と、例のげじげじ眉も動かさずに答えるのでございます。これはちと薬が利きすぎた——と思うと、浮いた声も自然に出なくなつてしまいましたから、恵印はまた元の通り世にも心細そうな顔をして、ぼんやり人の海の

向うにある猿ざるさわ沢の池を見下しました。が、池はもう温ぬるんだらしい底光りのする水の面おもてに、堤をめぐった桜や柳を鮮にじつと映したまま、いつになつても竜などを天上させる気色けしきもございません。殊にそのまわりの何里四方が、隙き間もなく見物の人数にんずで埋うずまつてもいゝるせいか、今日は池の広さが日頃より一層狭く見えるよとほううで、第一ここに竜が居ると云うそれがそもそも途方もない嘘うそのような気が致すのでございます。

「が、一いつとき時一いつとき時と時の移つて行くのも知らないように、見物かたずは皆片唾かたずを飲んで、氣長に竜の天上を待ちかまえて居るのでございましょう。門の下の人ますますの海は益広ますますがって行くばかりで、しばらくする内には牛車ぎつしやの数かずも、所によつては車の軸が互に押し合い

へし合うほど、多くなつて参りました。それを見た恵印の情けなさは、大概前からの行きがかりでも、御推察が参るでございましょう。が、ここに妙な事が起つたと申しますのは、どう云うものか、恵印の心にもほんとうに竜が昇りそうな——それも始はどちらかと申すと、昇らない事もなさそうな気がし出した事でございませぬ。恵印は元よりあの高札こうざつを打つた当人でございませぬから、そんな莫迦ばかげた気のすることはありそうもないものでございませぬ、目の下で寄せつ返しつしている烏帽子えぼしの波を見て居りますと、どうもそんな大變が起りそうな気が致してなりません。これは見物の人数の心もちがいつとなく鼻蔵はなくらにも乗り移つたのでございませぬか。それともあの建札を建てたばかりに、こんな騒さわぎが

始まつたと思うと、何となく気が咎めるので、知らず知らずほんとうに竜が昇ってくれば好いと念じ出したのでございませうか。その辺の事情はともかくも、あの高札の文句を書いたものは自分だと重々承知しながら、それでも恵印は次第次第に情けない気もちが薄くなつて、自分も叔母の尼と同じように飽かず池の面を眺め始めました。また成程なるほどそう云う気が起りでも致しませんでしたら、昇る気づかいのない竜を待つて、いかに不承ふしようぶし不承ようとは申すものの、南大門なんだいもんの下に小一日こいちにちも立つて居る訳には参りませうまい。

「けれども猿沢の池は前の通り、漣さざなみも立てずに春の日ざしを照り返して居るばかりでございませう。空もやはりほがらかに晴れ渡つ

て、拳こぶしほどの雲の影さえ漂つて居る容ようす子はございませぬ。が、見物は相あい不かわ変らず、日傘の陰にも、平張ひらばりの下にも、あるいはまた棧さ敷じきの欄干うしろの後にも、簇ぞくぞく々と重なり重なつて、朝から午ひるへ、午ひるから夕ゆうべへ日影が移るのも忘れたように、竜王が姿を現すのを今か今かと待つて居りました。

「すると恵印えいんがそこへ来てから、やがて半日もすぎた時分、まるで線香の煙のような一すじの雲が中なか空ぞらにたなびいたと思いますと、見る間にそれが大きくなって、今までのどかに晴れていた空が、俄にわかにうす暗く変りました。その途端とたんに一陣の風がさつと、猿沢の池に落ちて、鏡のように見えた水の面に無数の波を描えがきました。が、さすがに覚悟はしていながら慌てまどつた見物が、あれよ

あれよと申す間もなく、天を傾けてまっ白にどつと雨が降り出したではございせんか。のみならず神鳴かみなりも急に凄じく鳴りはためいて、絶えず稲妻いなずまが梭おきのように飛びちがうのでございませぬ。それが一度鍵の手に群る雲を引つ裂いて、余る勢いに池の水を柱のごとく捲き起したようでもございませぬが、恵印の眼にはその刹那、その水煙と雲との間に、金色こんじきの爪ひらめを閃かせて一文字に空へ昇あつて行く十丈あまりの黒竜が、朦朧もうろうとして映りました。が、それは瞬またたく暇あひで、後はただ風雨の中に、池をめぐつた桜の花がまっ暗な空へ飛ぶのばかり見えたと申す事でもございませぬ——度を失つた見物が右往左往に逃げ惑つて、池にも劣らない人波を稲妻の下で打たせた事は、今更別にくだくだしく申し上るまでもござい

ますまい。

「さてその内に豪雨ごううもやんで、青空が雲間くもまに見え出しますと、恵印は鼻の大きいのも忘れたような顔色で、きよろきよろあたりを見廻しました。一体今見た竜の姿は眼のせいではなかつたらうか———そう思うと、自分が高札を打った当人だけに、どうも竜の天上するなどと申す事は、なさそうな気も致して参ります。と申して、見た事は確かに見たのでございますから、考えれば考えるほど益審ますませんでたまりません。そこで側の柱かたわらの下に死んだようになって坐っていた叔母の尻だを抱き起しますと、妙にてれた容子ようすも隠しきれないで、『竜を御覧ごらんじられたかな。』と臆病らしく尋ねました。すると叔母は大息をついて、しばらくは口もきけないのか、ただ

何度となく恐ろしそうにうなず頷くばかりでございましたが、やがてま
 た震え声で、『見たとももの、見たとももの、こんじき金色の爪ばかり閃か
 いた、一面にまつ黒なりゆうじん竜神じやろが。』と答えるのでござい
 ます。して見ますと竜を見たのは、何もはなかくろうど鼻藏人の得業恵印の
 眼のせいばかりではなかつたのでございましょう。いや、後で世
 間の評判を聞きますと、その日そこに居合せたろうにやくなんによ老若男女は、
 大抵皆雲の中に黒竜の天へ昇る姿を見たと申す事でございました。
 「その後恵印は何かのひょうし拍子に、実はあの建札は自分のいたずら悪戯だ
 ったと申す事を白状してしまいました。が、恵門を始め仲間の法師
 は一人もその白状をほんとうとは思わなかつたそうでございます。
 これで一体あの建札の悪戯はずぼし凶星にあた中つたのでございましょうか。

それとも的まとを外れたのでございましょうか。鼻蔵はなくらの、鼻蔵はなくら人の、大鼻くろうどの蔵とくごう人得業とくごうの恵印法師えいんぼうしに尋ねましても、恐らくこの返答ばかりは致し兼ねるのに相違ちがひございますまい……………」

三

うじだいなごんたかくに
宇治大納言隆国うじだいなごんたかくに「なるほどこれは面妖めんような話じや。昔はあの猿沢池さるさわのいけにも、竜が棲すんで居つたと見えるな。何、昔もいたかどうか分らぬ。いや、昔は棲すんで居つたに相違あるまい。昔は天あめが下の人間も皆心しんから水底みなそこには竜が住むと思つて居つた。さすれば竜もおのずから天地あめつちの間に飛行ひぎようして、神のごとく折々は

不思議な姿を現した筈じゃ。が、予に談議を致させるよりは、その方どもの話を聞かせてくれい。次は行あんぎや脚あしの法師の番じゃな。

「何、その方の物語は、池いけの尾おの禪智ぜんち内供ないぐとか申す鼻の長い法師の事じゃ？　これはまた鼻蔵びざうの後だけに、一段と面白かろう。では早速話してくれい。――」

(大正八年四月)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集3」ちくま文庫、筑摩書房

1986（昭和61）年12月1日第1刷発行

1996（平成8）年4月1日第8刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

入力：j.ujiyama

校正：かとうかおり

1998年12月8日公開

2004年3月13日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

竜

芥川龍之介

2020年 7月12日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しむ青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>